不審者と泥棒猫のラストダンス

賀楽多屋

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

クーロンは、仕事の任務でとある海賊を追っていた。ナミは、アーロンとの取引のため近海にいる海賊や地主から海図を巻き上げていた。

二人の運命が交差する瞬間、物語のプレリュード（前奏曲）が流れ始める。二人は見事、ラストダンスまで踊りきることは出来るのか？

このお話は十話以内に終わらせる予定です。いつもの事ですが、更新は不定期となります。

目次

Prelude ―― 1
Concert ―― 12

Prelude

仕事で訪れた街の酒場には必ず入るようにしている。

風でブラブラ揺れている立て付けの悪いウエスタンドアを押して入り込むと、お天道様がこんなに高く昇っている頃から酒に現を抜かしている阿呆が幾人もおれを見てくる。

少し前にアラバスタで購入した筈の外套は、連日の強行軍ですっかりボロ切れと化していた。

ジャヤで買ったアロハパンツも裾が解れてきているし、その上から形だけでも羽織っているシャツも襟元が草臥れきっている。

唯一金になりそうな獲物の槍は、刃先をこれまたシミだらけの包帯で巻いているせいか、しょぼそうな品にしか見えない。

この事から分かるように、おれは何処からどう見ても物乞いか乞食にしか見えない格好をしている。

酒場にいた阿呆共はそんなおれの身なりから集ったところで僅かにも金が出てこないと察したらしく、白けたような雰囲気をどいつもこいつも醸し出してグラスへと向き

直った。
ただ、この酒場の主であるマスターだけがおれに渋面を見せてくる。
『此奴、支払える金はあるんだろうな』と物言いたげなそのマスターからの視線に答えるように口の端を引き上げてみせるが、増々疑惑の眼差しで見られることになってしまった。
点々と設置されているテーブル席の間を縫うように歩いていき、カウンター席に腰掛ける。
「やぁ、マスター。とりあえず、エールをくれないか」
「アンタ、払える金はあるんだろうね？」
手厳しいマスターの言に、ズボンのポケットから財布を取り出して開く。
そして、そのままマスターに中が見えるようにしてみせると、彼は遠慮なく俺の財布の中身を覗くや、一瞬にして押し黙った。
「・・エールだね」
「・・うん。銘柄とか産地に拘りはないから何でもいいよ」
どうにか、おれが一文無しで入ったわけでないことが証明できたようだ。
酒樽からエールを直接ジョッキに注いでいるマスターの手元を見ながら、よっこいせと背負っていた槍を足元に置く。

この大海賊時代で、おれのように槍を相棒としている人間は少ない。
リーチを求めるのであれば銃（ピストル）やパチンコがあるし、何より直ぐに戦闘態勢に入れるサーベルや刀と言ったものの方が好まれる。
長さがあるだけに不意の攻撃にはどうしても弱くなってしまうため、同士を見つけることはなかなか出来ないが、今更戦闘スタイルを変えることも出来ず、ずるずるとこのまま来てしまった。
「はいよ」
「ありがとう」
7対3の黄金比率で持って保たれている泡とエールに、良い店を選んだと口元が緩む。
礼もそこそこにエールを煽るように喉を鳴らして飲み込んでいく。
嗚呼、やっぱりこの街に着くまでに外れで麦畑を見てから、此処はエールが美味いと思っていたんだ。
太陽に照らされて、さざめく麦の穂を見てから喉の乾きが止まらなかったこともあり、漸くお目当てのものが飲めたとご機嫌になる。
今回の仕事は、組織的に――――否、おれ的にも大きな意味があるものだ。
なかなか首を縦に振ってくれない首領に頼み込んで、やっと手に入れたこの仕事を失

敗するわけにはいかない。

そのため、連日はこの近辺にある某島について嗅ぎ回っていた。

厳密的に言えばその島にいる海賊こそが本命なのだが、これがなかなかに厄介なことになっているようで、ちょっとやそっとじゃ手を出しにくい状態になっている。

仲間に『考える脳筋』と言われているおれは、思慮深く、根気よく、我慢強く下調べを繰り返しているのだが、これがそう上手くいかなくて調査は暗礁に乗りあげようとしていた。

このまま地道に下調べをし続けてもいいものかと頭を悩ませていると、背後が急にざわざわと賑やかになった。

「えれェ別嬪な嬢ちゃんじゃねェか」

「鼻の下伸ばした所で、お前みてぇなのが相手にされるわけが!?無いだろー」

「だよなー・・って、おいッ！　あの女の肩の所にある刺青・・」

「ありゃ、アーロン一味の刺青じゃねェか・・ってことは、もしや」

「近頃噂になっている泥棒猫じゃねェか？・・　海賊相手に盗みに入ってるっていう」

「関わらねェ方がいいぜ。アーロンっていや、この東の海（イーストブルー）では珍しく名の知れた一千万越えの賞金首だ」

最初はワイワイと持ちきりだった新しい客への話題が突然尻すぼみのように小さく

なって行ったかと思えば、とうとう誰もその話題について触れなくなった。
その話題の人物を一目見てやろうとジョッキを持ったまま首を動かせば、カウンター席の隅っこに腰を下ろす歳若い女が見えた。
歳若い――――いや、あれはまだ女の子って言えそうな年だ。
年の割には体が女として成熟していることもあって成人しているようにも見えるが、あれはまだ大人に差しかかる前の年頃じゃないかと予想する。
「マスター、いつもの」
「分かってるよ」
その子は、年齢に似つかわしくない疲れ切った顔で、かったるそうに酒を注文していた。
この店の常連であるのか、マスターは女の子には少し親しげだ。
おれには一つも寄越さなかった好意的な視線を向けている。
おれにはあんなにツンケンしていたのに、若い女の子の方がやっぱりマスターも良いんだろう。おれとて、自分のような見窄らしい身なりの男よりは可愛い女の子の方が愛想良くなるに決まっている。
女の子が海賊の一味なんて酷い世の中になっちまったもんだと、半分も残っていないエールを飲み干す。

まだ金にゆとりもあるし、二杯目をマスターに頼もうと片手を上げた所で、下卑た男の笑い声が近くから聞こえてきた。

「げへへへへ。お嬢さん、こんな所で一人酒ってェことは、声が掛かるのを待ってんだろォ」

「‥‥違うわ」

‥‥嫌な予感がして声の方を見ると、目がギョロギョロと魚みたいに動いている壮年の男が、あの女の子にしつこく絡んでいる所であった。

定まらない視線で、女の子をどうにか外に連れ出そうとしている男がとうとう女の子の手首を掴む。

「またまたー、そんなつれないこと言うんじゃねェよ。オレァ、今日は一儲けしてきた所なんだぜ。アンタみたいな良い女を買える金が———」

男が全てを言い終わらないうちにパシンと皮膚を打つような音がして、男の手が女の子によって華麗に打ち払われる瞬間を見た。

まさか女の子にこうも手酷くコケにされるとは思わなかったらしい男は、暫く呆然と自分の払われた手を見ていたが、それも数秒のことだ。

何をされたか克明に理解したらしい男の顔が、みるみるうちに熟れたトマトのようになっていく。

「このッ、クソアマが‥‥‥!」

観衆が見ている前で、格下だと思っていた女の子に男の面子を潰されて頭に血が上りきってしまったらしい男は、腕を大きく振り上げる。

打たれると分かっているはずの女の子は、一切怯むことも無くマスターから酒が届かないかとカウンターの向こう側へと視線を向け続けていた。

女の子のそんな無情な反応に、とうとう男も業を煮やしたのだろう。

男の手が女の子の横っ面を叩こうとして振り下ろされるのと同時に、そいつの手をおれの手が掴んだ。

「‥あ?」

‥突如、視界の端から乱入してきたおれに、向こうも処理しきれないと戸惑っているようだ。

女の子も、まさか助けが入るとは思わなかったようで、おれの横槍に少し驚いたような顔をしている。

本当に近くで見れば見る程に、あどけなさが目立つ少女であった。

果実のような鮮やかさに似たオレンジ色のショートカットの下から覗く目が、信じられないと見開いてるのが何処か悲愴さを感じさせた。

「フラれたんだから大人しく帰るべきだろ、お兄さん」

「んだと、小僧!?　手前ェにゃ、関係ねェだろうが!!」
「此処は、酒場だぜ。フラれた男の遠吠えを聞いてると、酒が不味くなるんだ。アンタがおれの酒代を奢ってくれるってんなら別だがな」
「にゃろッ！　透かしたことばっか言いやがって!!」
おれに手を掴まれているため、男は蹴りを放ってきた。
だが、高々街のチンピラに遅れをとるようであっては自分の経歴に傷がつくというもの。
男の蹴りを蹴りで持って受け流した後、奴の重心が崩れたのと同時に豪快に背負投を決めてやる。
どしんと地を揺るがして、華麗に投げられた男は目を回して気絶していた。
見事に大の字になって寝転んでいることもあって、投げたおれが言えることでもないが大層不憫な光景となっている。
あんまりにも演舞の如く綺麗に全てがキマッたこともあって、酒場の客からは拍手喝采を受ける羽目になった。
「アンタ、乞食みてェな格好している割にはすげェじゃねェか」
「もしかしたら、海から漂着したならず者かとも思っていたんだが、やるなァ」
「此処まで、綺麗にキマッちまうもんなんだなー・・・人は見かけによらないもんだ」

「乞食でならず者で悪かったな！」

褒められているようで、その実貶しているんじゃないかと彼等の声を聞いてるうちに疑心暗鬼に陥った。

……ととと、勝利の余韻に浸っている場合じゃない。

例の少女の無事を確かめようと背後を振り返れば、彼女の姿は既にそこにはなく、カウンターの上にお代が置いてあるだけであった。

刹那、ウエスタンドアがギィと軋むような音を立てたのを聞いた瞬間に、おれは財布から少し多めに酒代のベリーを取り出すや、カウンターの上に叩きつけるように置く。

「のんびりするつもりが、少し野暮ができた。また来るぜ」

「毎度。お節介なあんちゃん」

踊るように踵を返して、客の間を縫って歩くのも面倒いと少々彼らの片側の肩を借りて渡り歩く。

あんまり力まないようにしたつもりだったが、成人男性の体重が片側に掛かることもあって借りた連中は軒並み呻き声を上げるが、おれはそのまま先を急ぐように店を飛び出した。

「あの乞食みてぇな兄ちゃんッ……！　次あったら、ただじゃおかねぇからな!!」

とんでもない捨て台詞が最後聞こえたような気がするが、先ずはあの少女だと大通り

を見渡してみるも、既に姿は無く。
仕方が無いと、一飛びで酒場の屋根に登って周囲を見渡せば、裏路地を必死に走る少女の姿を発見した。
「華麗な逃げこなしだな」
一目散に逃げているのではなく、ちゃんと最善のルートを構築して、足音も小さく、足跡も出来る限り残さぬように細心の注意を払って逃走しているようだ。
随分と逃げ慣れているもんだと感心するのも程々に、おれは屋根から屋根を渡るようにして少女の後を追って行く。
こちらの方が、手っ取り早く少女に追いつくとはいえ、なんだか泥棒の真似事をしているような気分に陥ってくる。
おれは正義の味方であるのに、なんとも遺憾なものだ。

そう言えば、おれが探りを入れている海賊団の島には、オレンジ色の果実が生った木が生えていた。
オレンジやグレープフルーツと似た柑橘類だろうが、それらに比べて小ぶりなあの果実は、太陽をめいいっぱい浴びてるからか、とても美味しそうだったな。
彼女の髪色は、正しくあの果実の色。

こんな薄暗い路地じゃなくて、それこそ太陽の下にあるメイン通りで拝みたいものだ。

「アーロン一味の、泥棒猫か。あの中の唯一の人間っていうのは、綻びになるのか」

まだ大人にもなってない少女を利用するのは———とても心苦しいことである。

おれの正義が問われることになるだろうが、それ以上に任務を遂行したい気持ちの方が強い。

「やるしかねぇよな、いっちょ」

Concert

『一億ベリーで村を買う!?』

ふと脳裏に過ぎったのは、永久歯が生えてきた姉の裏返った声であった。

ナミは、戦争孤児である。

両親の顔も知らなければ、そもそも自分が何処の島の出身なのかも覚えていない。

まだ赤子であったナミは以後姉になったノジコと一緒に、戦争当時、海兵であったベルメールに保護され、そのまま彼女の養子となったのだ。

母親と呼ぶには歳若いベルメールは、だが、今思えば立派にナミと姉の母親役を全うしたように思える。

良いことをしたらその分、沢山褒めてくれた。

悪いことをしたらその分、沢山叱ってくれた。

お金が無いにもかかわらず、休みなく日中働き、家事も行い、ナミと姉の面倒を見ていたベルメールは本当に凄い人だと思う。

だから、あんな魚人なんかに命を奪われて良い人ではなかった。
『シャハハハハハ!!!　金のねェ奴ァ死ぬんだよ!!!』
お金が無いことが〝悪〟だと、思い知った瞬間だった。
あの無敵なベルメールでも、死ぬんだと見せ付けられた瞬間だった。

ナミ達の世界が、粉々に壊れてしまった瞬間だった。

ベルメールが銃(ピストル)で撃ち殺される時を、たまに夢で見る。
カジキ鼻のアーロンの高笑い。銃口から上がる硝煙。
見ていることしか出来ない不甲斐ない自分。
繰り返し繰り返し、何度も見るその夢は、時に白昼夢としても現れる。

「……あ、何を思い出してんのよ!　こんな時に」
昼下がりの陽気な日差しが窓から零れるお昼時。
成金領主の私室にしては、趣味の良い調度品で占められたこの部屋で、昼寝をしたくなるのも無理はないのかもしれない。
箪笥を開けて、ぼーっとしていた自分を戒めるように、ナミは二度己の頬を叩いた。

今は、とある島の領主の家に潜入中だ。
その領主はこの近辺を縄張りとしている海賊と通じているらしく、賄賂として渡されているお宝や海図、本等をこれでもかと蓄えているようで。
耳ざとく、そのお宝情報をゲットしたナミは領主の家を調べあげ、彼等の行動パターンを頭に入れた上で、今回の空き巣に及んでいた。
現在、この家の家主である領主は、日課である美術商巡りに配下達と繰り出している。
家に残っているのは、ハウスキーパーぐらいなものだ。
素人相手なら余裕で出し抜けるだろうと予測をつけて、ナミはしなやかに家宅侵入を果たし、台所で鼻歌を歌いながら調理中のハウスキーパーを尻目に、領主の私室に入り込むことに成功した。
あとは、宝と海図を手に入れることが出来れば、今回のミッションはコンプリートである。
故郷の島を一億ベリーで購入出来れば、また昔のような幸せが戻ってくるだろう。そうじゃない場合なんて、考えない。
ベルメールと、姉と平和に暮らしたあの島さえ取り戻すことが出来れば、ナミのこの血反吐を吐くような苦労や、魚人達に踏み躙られた尊厳は報われるのだ。
だから、だから。

箪笥の底が見た目よりも浅いように感じて、引き抜けないかと弄っていたら、底が外れて新たな層が姿を表した。

――ナミさんの嗅覚を舐めんじゃないわよ。

どうやら、二重底になっていたようだ。

たかだか、こんなロクな名産品も無い島の領主が持っているには些か不相応な代物に思えるが、しかし、その中身は厳重に隠し立てされるに相応しい内容となっていた。

「リバースマウンテン近海の海図だわ……！　宝石は、ダイヤモンドにルビー、サファイア、エメラルド。ダイヤモンドは……ラウンドブリリアントカットね!!　一番理想的な研磨法とは聞いていたけども、本当に綺麗」

売ったら、どれぐらいの値がつくだろう。

貯蓄が五千万ベリーを越えてから、積年の悲願も先が漸く見えてきた。

もしかしたら、このダイヤモンドによって、もっと先になるだろうその未来を傍まで手繰り寄せることが出来るかもしれない。

興奮するような喜びに、胸の奥が熱くなるようであった。

つい目元がじんわりと熱くなってきてしまったが、まだ泣いていい頃合いじゃない。

何より今日は、敵陣であるのにも関わらず、気が緩みすぎだ。

ナミはさっさとお目当てのお宝と海図を持参していた袋に放り込んで、この場を後に

しようと立ち上がる。

「それまでだ。泥棒猫」

急に耳元に届いた声の方へと顔を向けると、美術商巡りに行っていたはずの領主が、配下を一人連れて扉の所で立っているのが見える。

――まだ、美術商から戻るのに三十分はある筈なのにどうして……!?

ナミの動揺の声が聞こえたのか、領主はだるんとズボンの上に乗っている腹の脂肪を揺らして得意げに笑った。

「貴様が私の事を嗅ぎ回っていることはとうに知っていた。決行日が今日になることも、な。本当に可哀想な猫よの、貴様は」

ムホホホホホッ！　と哄笑する領主の傍で、配下が腰に差しているソードを抜く。

目を走らせて、あのソードに対抗出来そうなものはないかと見繕うと、壁に暖炉の火かき棒があるのが見えた。

あまり武術は得意ではないが、多少の心得が無ければ、生きられない世界に身を投じてきたのだ。このぐらいの修羅場、潜り抜けて見せなければ。

ナミは、腰に宝石類が入った袋を頑丈に括り付けて、そのまま火かき棒目指して走り

出した。
すると、配下の男もソードを振り上げて駆け出してくる。
しかし、ナミの方が少し足が速かった。
火かき棒を手にしたら、男の鳩尾を狙って鋭く突く。
思ったよりも正確に急所を狙ってくるナミに、配下も慌てて防ごうとソードで弾こうとしてくるのが見えた。
なので、鳩尾を狙うことは取り止めて、ナミは一旦ソードのガードを受け流し、配下の頤を目掛けて振り上げる。
カーンと火かき棒が頤を打ち上げる音がしたかと思えば、配下がぐるんと白目を向いた。
どうやら、攻撃が急所のど真ん中にクリティカルヒットしたらしく、そのままどさりと配下は床へと立ち崩れる。
火かき棒を持つ手に力を入れて、領主の方へとそのまま顔を向ければ、件の領主はナミを猛獣を見るような目付きで凝視し、口を戦慄かせていた。
「えへ」
「……はは」
とびっきりの愛想笑いをお見舞してやれば、領主も合わせるように引き攣った笑顔を

閃かせる。
一瞬にして、立場が逆転した。
攻めと守りが選手交代したのだ。
だが、少し上手くいったからといって油断するようなナミではない。
そもそも、あの二人が近づいてきている事をもっと早くに察知することが出来たはずなのに、珍しく心が浮き立っていたせいで、警戒を怠ってしまったのだ。
だから、こんな雑魚とエンカウントする羽目になってしまった。
ナミは火かき棒を領主に向かって投擲する。
勿論、当たっているかどうかの確認なんてするつもりは無い。
「ぎゃ――――――っ!!」
「じゃあね。お宝と海図、ご馳走様です♡」
領主の汚い悲鳴をＢＧＭに窓を勢いよく押し開けるや、ナミはそこから身を乗り出して、体全体を宙に委ねる。
二階から降りることなど造作もないと、しなやかに地面に降り立ったナミは、頭の中に叩き込んでいる逃走ルートを呼び覚まし、そのルートに沿って駆け出す。
とんだ番狂わせがあったものの、普段よりも上手く仕事を終えられそうだ。
つい鼻歌を歌ってしまいそうになるが、アーロンパーク（魚屋敷）に戻るまでは油断しちゃいけ

ないと気を引き締める。
あと、もう少しでメインストーリートに辿り着く。
そしたら人混みに紛れて、海に出てしまおうという算段であったのだが、やっぱり世の中、なかなかそう上手くはいかないらしく。
「来たな、泥棒猫」
「首を長くして待っていたぞ」
ナミの行先のど真ん中に立つ、細長のっぽの男と小柄で太めの男。
拠れた衣服に身を包み、艶のないフケまみれの髪を見るところ、あまり良い人物達とは言い難いだろう。
恐らく、領主が街のゴロツキを端金で雇ったに違いない。
――間抜けそうな感じだったけども、海賊と取引してるだけはあるって事ね。退路を予測して伏兵を仕込むなんて……やってくれるじゃない。
意外と頭脳派であった領主を見直していると、ゴロツキ達はナミがこの絶体絶命の状態に気落ちしていると勘違いしたようで、何処か得意げな顔で口を開いた。
「盗んだ物さえ戻ってくれば、あとはどうでもいいとのことだ。生憎、オレは、女に縁が無くてね」
フケだらけの髪、不衛生を極めたような肌、ゴミのついた衣服。

どこからどう見ても、ゴミだめで暮らしているとしか思えない男達が女性と縁があるはずも無い。

ナミの年齢の割には成熟した体を、それこそ頭頂部から爪先まで舐めるように見る彼等が、何かよからぬことを考えていることは明白だ。

ナミはつい吐きたくなる溜息を喉で潰して、身構えるように腕を組む。

「見たら分かるわよ。モテないからって女の子を襲うとか、悪趣味すぎね」

「威勢よく吠えられるのも、今のうちだ」

「私は高いわよ、お兄さん方。払えるベリーはお持ちで？」

「よくニャーニャーと鳴く雌猫だ」

拳を構えて、勢いよく突進してきたのっぽに、ナミはいつでも回避出来るよう後ろ足に力を入れる。

こんな男達に体を触れさせるなんて勿体ない。

一触り、五千ベリーは貰わないと採算が取れないわ――なんて、冗談めいたことを胸中で零しながら活路を必死に探す。

こんな所でゲームオーバーを迎える気なんて、それこそ勿体なさすぎるから。

――刹那、頭上からバサバサと衣が翻るような音がして、ナミとのっぽの間に一人

の男が落ちてきた。
「……は？」
「……え？」
それは、正に予想外中の予想外。
のっぽとナミの気勢の削がれた声を聞きながら、見事無事に地面へと着地を果たしたその男は、大変見慣れない身形をしていた。
あんまりな急展開に、ナミだけでなく、のっぽやちびですら男の存在を受け入れられずにいるようで、闖入者の顔を上げる仕草を不思議そうに見詰めるばかりだ。
だが、そんな夢心地も男の低い声を聞ければ現実味を帯びてくる。
「こんな路地裏で逢い引きとは、お天道様に隠さなきゃならないようなご関係で？」
煤ばかりがついた外套は、元は何の色だったのかも分からない程に剥げており、その外套からチラリズム的に見える服は深緑色の襟詰めの襦袢だ。この島では一切見ることの出来ないその衣服は、劇か何かの衣装のようにも思えた。
整髪されていない長髪は適当に項辺りで束ねられているのが少々不潔だが、両目の際の朱の彩りがなんとも神秘的で、あののっぽとちびよりかは幾分かはマシのようにも思える。その化粧がやはり、劇団か何かに所属している俳優かのように見えさすが、男の纏う雰囲気がその想像を否定する。

そんな見慣れない装飾の数々の中で最も目を引くのは、背中に背負われた刃が剥き出しの槍であった。

これが、彼を劇団の俳優だと最も思えない理由だ。

柄に巻かれた滑り止めが脂汗を吸いまくったせいで変色していたが、刃先だけは新品の如く鈍い光を放っている。

手入れの行き届いたその得物が雄弁に語るのだ。

――この男は、武に生きる武人なのだと。

「な、なんだ!?　お前は!?」

急なイレギュラーに、口角泡飛ばしてのっぽは詰問するが、不届きな闖入者は何処か落胆した様子。

「予想通りのチェリーマンだな、こりゃあ。おれの質問(ジョーダン)すら聞いてくれない。はァ、骨のねぇ仕事」

「手前ェ、さっきからガタガタうるせぇんだよ!　俺の邪魔をするんだったら死ねェ!!」

そして、予定を大いに狂わされたのっぽは、目先の餌(ナミ)に我慢ならず、先手必勝とばかりに懐に仕込んでいた短剣を取り出すや、流れるように鞘から抜いて、男に飛びかかる。

男なら容赦しないとばかりに、さっきよりも気迫があるご尊顔でのっぽは迫ってくるが、男はなんとも呑気な有様だ。
「チェリーマンで、早漏野郎ってか。最悪なコンボだっつーの」
飛び掛ってくるのっぽを緩慢に見上げて眺め、男はフッと皮肉げに口角を上げる。
のっぽから振り下ろされる短剣が、一瞬だけ刃を光らせる。
微動だにしない男の背中を眺めることしか出来ないナミは、つい声を上げてしまった。
「危ない……!!」
瞬間、のっぽの短剣が男の喉元を切り裂く前に、男の掌底がのっぽの顎を捉える。
「敵の懐に入ったからには、もっと迅速に動かねェとな」
「ぐふっ！」
天高く突き上げられた男の掌と同時に、のっぽは宙を舞いながら海老反り宜しく反り返り、そのまま擦れるような音を立てて地面に伏す。
彼の瞳孔は裏側へと回っているらしく、白目が剥き出しだ。
しかも、歯同士が強烈に噛み合ったことで脳震盪でも起こしたのか、肌色が一瞬にして土気を帯び始めている。
男によって一発でノックアウトされたのっぽを、ちびは引き攣ってしょうがない両目

で見下ろして、それからつい伺うような顔で闖入者を見る。
なんとも媚びるようなその彼の視線に、ナミは冷え冷えとした気持ちを抱く。
プライドを捨ててまで、生き残りたいかと女のナミでも思うのだが、瞬間、己もこの男と何も変わらないのだと思い出し、つい目を逸らす。
養い親を殺した相手に媚びへつらい、なんとか取り入った自分とこの男。
一体、何の差があるというのだろうか。

一瞬でも自分の境遇から目を逸らしたことが耐えられず、胸元で拳を作るナミとは打って変わり、見逃して欲しいと顔面いっぱいにちびは男に訴えていたのだが。
そうは甘くないこの男。
ちびに向かって、ふんわりと笑い開口一番。
「さあて、そろそろテクニシャンのご登場といこうぜ。連チャンで童貞がってことはねェよな？　それとも、類は友を呼ぶって奴か？」
背中で飾りとなっていた槍を構えて、一振。
明らかに挑発だと分かるそれに、チビは背筋を震わせてくるっと踵を返す。
そして、一も二もなくのっぽを置いて逃げ出した彼の去り際は、なんとも見事なものであった。

ただでさえ、小柄で小太りなチビであったのに、今はもう豆粒ほどにしか見えない彼の背を見送って、男は「あーらら」と独り言。
「据え膳食わぬは男の恥って習わなかったのか、アイツ」
呟いている途中で、背後の空気が揺れたような気がした。
男はその己の勘を気の所為で済ますことなく、その場で器用に踵を返して、目前まで振り下ろされている鉄パイプを難なく槍の柄で受け止める。
「アンタ、化け物かなんかなの!?」
「なかなか過激なお礼だな、お嬢ちゃん」
鉄パイプの主は、ナミであった。
顔を真っ赤にして、ありったけの力を込めて男とどうにか競り合いに持ち込んでいるが、相手が余裕をもって自分と対峙していることは見て取れた。
油断でもして隙でも見せてくれないかとは思ったが、相手はやはりナミが太刀打ち出来るような人物ではない。
この競り合いは勝てないと早々に見切りをつけたナミは、バックステップで下がり、下から男を睨めつける。
「何が狙いよ。生憎、泥棒やってる割には貧乏よ」
「襲われそうなお嬢ちゃんを助けたかった、と紳士ぶられるのは好きかい？」

「物語の王子様ならともかく、不審者からなら反吐が出そうよ」
「じゃあ現実らしく売った恩をかさにきて、君に取引を持ちかけよう」
男は散々なナミの言いようには一つも意に返してないようで、飄々と話を続ける。
男が何の対価を求めてくるのかを、ナミは固唾を飲んで聞くことにした。

「アーロン一味に潜り込む手伝いをしてくれないかな、お嬢ちゃん」